非核奈良

森本孝順（唐招提寺長老）筆

2010年
8月15日
第92号

発行　非核の政府を求める奈良の会
〒630-8213　奈良市登大路町３６　大和ビル４Ｆ
奈良合同法律事務所気付
電話0742-26-2457 FAX26-3010　郵便振替01020-1-56459

私たちは非核の五項目を実行する政府を求めます

①全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
②国是とされる非核三原則を厳守する
③日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
④国家補償による被爆者援護法を制定する
⑤原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

核兵器廃絶へ

全会一致での最終文書

一歩の前進を確かなものに　NPT再検討会議の成果と課題

事務局長　今　正　秀

会議最終日の5月28日に全会一致で採択された最終文書では、まず、2000年の再検討会議で確認されながら、05年の会議で米・ブッシュ政権によって無視された「核兵器の完全廃絶を実現するという核兵器国の明確な約束を再確認」。

さらに、「すべての国が、核兵器のない世界を達成し維持するために必要な枠組みを確立するための特別な取り組みをおこなう必要について確認する」とし、そのために具体的な行動を取ることを強く促しています。

◇

実際に会議では、「核兵器国による核軍備撤廃促進のため、2011年までに協議を開始する」、「核兵器の完全廃絶のための行程表で合意する方法、手段を検討するため、2014年までに国際会議を招集する」という二つの期日を明記した行動計画が提示されました。

核保有国も参加した国際会議で、交渉に向けた期日を限った案が示されたのは初めてのことでした。核保有国の抵抗で、この期日は最終文書からは削除されましたが、「加盟国の大半は、こうした（核軍備削減・廃絶の）法的枠組みは具体的な日程を含むべきものであると考える」とされ、核保有国は14年の準備会合に進捗状況を報告すること、15年の次期会議では条約第6条の核軍縮交渉義務の完全履行について検討すること、核兵器廃絶を取り扱う小委員会を設立することなどが盛り込まれました。

また、イスラエルの核兵器保有と、それへの対抗を意図したイランの核武装が問題となっている中東地域について、12年に全中東諸国が参加して、核兵器と大量破壊兵器のない中東地域実現に関する会議を開催することとされました。北朝鮮については、その「核実験を最も強い表現で非難」し、核保有国の地位を得られないことを再確認しています。

当初示された期日が最終文書で削除されたり、表現が薄められたり、もどかしい感は否めないものの、最終日前日まで最終文書採択の見通しが立たなかったにもかかわらず、会議議長や国連事務総長の働きかけで、以上の内容を含む最終文書が、核保有国を含む全会一致で採択されたことの意義は正当に評価されるべきでしょう。

私たちに求められるものは

重要なことは、最終文書に盛り込まれた内容を確実に実現するよう、核保有国を含む参加国への働きかけを続けることです。

今回、日本と世界から届けられた核兵器廃絶署名は、参加国に核兵器廃絶の国際世論の高まりを目に見える形で示しました。こうした取り組みを強め、国内世論を高め、国際世論と連帯することと、今回の会議でまったく存在感のなかった日本政府に核兵器廃絶に向けたリーダーシップを取るよう促していくことが、私たちに求められています。

（写真は国際会議が開かれたリバーサイド・チャーチ）

NPT再検討会議に
奈良県下全自治体の首長が核廃絶賛同署名
―全国で初めて―

奈良県議会議員
今井光子

5月ニューヨークで開かれたNPT再検討会議に行ってきました。県会議員として参加するに当たり、奈良県は全自治体が非核平和宣言の自治体になっており、私は全首長さんの賛同署名を届けたいと思いました。

まず地元北葛城郡で広陵、上牧、河合、王寺の4町の町長さんにお願いして賛同していただきました。しかし出発が近づき、確認すると県下の首長の半分も集っておらず、それから、直接電話でお願いしたり、それぞれの地元の共産党の議員さんに頼んだりしたところ、どんどんファックスが送り返され、5月1日には95%の賛同を頂き、携えて、出発することができました。日程を終え、8日に帰ってきましたが、会議の最終日までに100%集めたいと再度お願いをして、奈良県では全国で初めて知事を含め全自治体の首長さんの賛同を頂くことができ、喜んでいます。

核兵器の廃絶という言葉が今回最終文書に記入され、日本からの700万の署名が世界を動かす大きな力になりました。世界192カ国中184カ国が核兵器を持っていないし、今後も作らないことに合意をしています。もう後わずかな国だけです。

パン・ギムン事務総長は「核兵器のない世界は地平線のところに見えてきた。その日は必ず、やってくる。そのときが来たら世界はあなたがたに感謝するでしょう。」といわれました。

奈良県の取り組みが日本中に広がっていけば非核の政府が実現できるでしょう。日本が日米安保条約をやめて核も基地もない国にすることは世界平和に大きく貢献する道です。普天間基地の無条件撤去の闘いに連帯して頑張ろうと思います。

国連本部で絵葉書を買って、首長さんたちに送ったお礼状

被爆直後の広島・長崎
―父の日記より―

木村 宥子

1945年8月6日、それは今日まで続く核兵器拡大競争と核兵器廃絶への困難な道程の始まりだった。

当時の広島と長崎の様子の一端を、仁科芳雄博士の原子爆弾調査チームに参加して現地を訪れた、若き原子核物理学者であった父が日記に書き残している。以下はその日記からの抜粋である。NPT再検討会議に、平和市長会議に、あらゆる核兵器廃絶運動に希望を託し、忘れてはならない広島長崎の記憶のために一部を抜書きしてみる。

8月8日　広島の新型爆弾はウランならん。調査に行く話。**10日**　午後広島より空路サンプルがついた。先ず電話線のActivityをみるにNaturalの三倍程度の弱Activityがある。**15日**　14日朝広島につく。広島まで行かなくても向洋にてすでに本質的に新型爆弾なること一目瞭然である。未だ中心地にいってみないが広島駅の状況からその惨が推察される。似の島で死んだ人の頭がい骨にNaturalの10倍程度のActivityのあることを知る。Uranium bombなること確定せり。〈同じ頃、似の島で軍医だった方の話：大変苦しがって「お前はオレを殺す気か！」と怒鳴りながらバタッと死んでしまう。その他、壁や床に頭をたたきつける動作、突然の発狂する人もあったとのこと。〉

長崎爆心点標識

9月24日（9月19日再び東京を発ち広島、長崎へ）大きなビルの外壁に爆風で叩きつけられた跡を示す大きな血痕など一ヵ月半を経過した現在でも未だ歴然たるものである。

10月2日　8月17日に測定したゆかりの地点で再びLauritzen（註：放射能測定器）の測定。8月17日と比較して大してdecay化していない。驚くべきことである。**7日**（長崎）由緒ある天主堂も無残に破壊されてゐる。一番奥の祭ダンのあたりに死臭あり。恐らくこのレンガの下には祈祷中の司祭がゐたのであろふ。爆発時が丁度昼の祈りの時なれば。

木村一治（1908－1996）原子核物理学者。1945年当時は東京の理化学研究所で中性子の研究に従事。仁科芳雄博士は同じく理化学研究所で原爆製造に当たっていた。なお、この日記はリアルタイムの原爆の記録としては第一級のものとされ、父の死後母の手によって広島平和資料館に寄贈された。

（常任世話人）

沖縄のこころ

「私たちもう後戻りする気はないですよー」

―にこにこ会、与那国島に行く―

宮城恭子

30年ほど前、沖縄協同病院で糖尿病管理の仕事を一緒にしていた仲間のグループ「にこにこ会」。隔年で小旅行を楽しんでいる。各地の歴史や文化に触れるとともに、日常から解放され、酌み交わしながらのユンタク（おしゃべり）が楽しみである。

（与那国の私設民俗博物館前で前列左が筆者。）

参加者は定年期を迎え、話題はもっぱら「健康と美容」だが、今回の与那国行きでは、話は「普天間・辺野古」に集中した。4・25県民大会の日は、渋滞で那覇からバスで4時間かかっても読谷の会場に到着できなかったという。それでも九万人を超す人が参加した。5月16日の大雨警報の土砂降りのなかでの普天間基地13キロの包囲行動（人間の鎖）についてもそれぞれ熱っぽく話してくれた。「祖国復帰運動のころの盛り上がりをおもいだすさー」と語ってくれたのは人民党時代からを知るTさんだった。

花酒の島

与那国島は石垣島へ127キロ、台湾へ111キロの地点にある日本最西端・国境の島。元病院職員でのちに沖縄県会議員をつとめた宮良作さんがここの出身であることを頼って、一味違う旅行をと欲張ったのだが、与那国空港へ到着して島人二人の出迎えを受けた瞬間、作さんの暖かい歓迎の気持ちが私たちを包み込み、私たちはすぐさま、うちとけた。

与那国島は葉っぱの形をした30平方キロメートル足らずの小さな島だが、火山活動と黒潮の激流が作り上げた起伏に富んだ山や岩、自然と多様な文化が色濃く息づいている。最近ではDr.コトー診療所や国際カジキ釣り大会で有名。海底遺跡はムー大陸とも邪馬台国ともいわれている。

私が一番感激したのは花酒。黒麹菌とタイ米で作られた蒸留酒の醸し出す芳しい香りに満ち溢れる酒蔵！

「どなん」「与那国」「舞い富名」の三つの酒蔵で伝統のスピリッツを今も作っている。

花酒の〝はな〟とは初めの意味で、蒸留過程の最初に出てくる濃度の濃い酒の意味。60度のアルコールは死者の洗骨に使うものだとか。

丘の中腹にある沢山の立派なお墓群を見て、祖先を敬い自然と交流・一体化する中で築かれた島の豊かな文化を羨ましくも感じた。

朝鮮の漂流民との歴史

与那国島が歴史に文献的に登場するのは1447年。朝鮮の済州島の住民が難破し、漂流した三人が島人に助けられ約半年滞在した間、水や食料を与え、時にはアルコール（これは蒸留酒ではなかった模様）も振る舞い、体力の回復と黒潮の流れを読んで、琉球へ送り、琉球王にもてなされたのち、帰国した。漂流民を取り調べた朝鮮の役人たちが書き記した文書があるとのこと。

その頃から与那国の人々は米や魚、貝などを食べていたらしい。支配者も盗人もいない、優しい平和で豊かな島だった。1522年琉球王国に組み込まれるまでは独立した国として存在していたらしい。

何を学んだ鳩山さん

鳩山首相（当時）は「学べば学ぶほど在沖縄海兵隊は抑止力として重要」と「普天間移設先は辺野古にお願いする」といきなりまる投げしたが、アメリカの国防長官は米議会で「海兵隊は海外遠征部隊で日本を守る任務は与えられていない」と証言している。また2010年度アメリカ軍事費6930億ドル（61兆円）は国家歳出の42％を占め「在沖縄海兵隊不要論」がアメリカに広がっているという。

戦後65年を迎えるが、昔は「軍用道路1号線」と呼ばれていた国道58号線にはいたるところフェンスが張り巡らされて、基地オンパレード道路。普天間基地は海兵隊のヘリコプター基地で、宜野湾市面積の26％を占め、

（次ページへ続く）

″沖縄″を記憶にとどめるために

岡谷　よし子

マザーリーフ

普天間の基地「移転」問題に沖縄がどれほど振り回され、7月の参議院選では争点にならず、辺野古への移設は日米合意ですでに既成事実のように報道されている今、私たちにできることは何だろうか？

沖縄から遠く離れた私たちが、沖縄をリゾート地としての認識だけでなく、沖縄の問題を私たちの問題として関心を持ち、痛みを共有するそのきっかけを作れないかと考えました。

私は沖縄の友人からもらったマザーリーフの葉っぱを配っています。マザーリーフは、一枚の葉っぱから次から次へと新しい葉っぱが生まれる不思議な植物。上手くいくと幻の花が咲きます。

マザーリースを差し上げながら沖縄の話を伝え、その成長を見ながら沖縄のことを考えてまた新しい人に伝えて下されば、マザーリーフの輪は広がっていきます。私が伝えられることは些細ですが、沖縄を覗く窓口になればと思っています。

川柳も発表の機会がある度に沖縄のことを詠んでいます。

―――◇―――

三線（サンシン）におばぁの海が満ちてくる
和（な）ぐ海とわたしの空が欲しいだけ
サトウキビ祈るかたちで揺れている
東京で見る沖縄は美らの海
沖縄の心ジュゴンの泳ぐ海

（常任世話人　「川柳九条」主宰）

周辺に19の小中学校や大学が存在する。市民生活にとって世界一危険な基地と言われている。嘉手納は町面積の83％を基地が占め、残りの17％に14000人が住んでいる。沖縄戦が終わり、米軍の捕虜となり収容所生活をおくり、ようやく帰宅を許されて帰ってきたら、自宅は壊され基地として撤収されていたのだ。

与那国島と9条

在日本米軍基地の72％が集中する沖縄にあって、ここ与那国には米軍基地も自衛隊も無い。現町長は自衛隊誘致賛成派とのことで、町の真ん中に「自衛隊誘致は与那国の悲願」と書かれた大きな横断幕。とその横には「自衛隊基地はいらない、憲法9条を守ろう」のたれ幕があった。案内してくれたTさんは「あれは私の作品よ。無論県民大会にも参加したよー」と涼しい顔。

夜はJさん宅に招かれ、与那国料理の数々と島酒。

「日本の武家屋敷の座敷には刀、こちらはサンシンが床の間に置いてある。これが沖縄さー」。唄と踊りで夜もふけた。与那国の唄や踊りは、沖縄本島とも石垣島とも違っていた。サンシン、笛など素晴らしい音色で演じた若者は芸大出身とのこと、島独自の文化を大切に守りぬく人々の健気さ、潔さ、豊かさが身に染み入った。

最後はもちろん総勢15～6人のみんなでカチャーシーを踊ってお開き。長年にわたる国境の町の生きざまの心意気、「客人をもてなし、自らも大いに楽しむ」を見た気がした。

大きな物差し　広い心で

鳩山前首相や管首相の態度を見て、あー日本の政府は沖縄を昔も今も半分属国扱い、「日本のいいように使える捨て駒」の意識なのだと認識した。沖縄の施政権返還に際してのアメリカ軍の位置づけ、太平洋戦争末期の沖縄戦、明治新政府の琉球処分、島津の琉球入りとその後の薩摩藩による支配……沖縄を日本に都合のよいように利用し、絞りつくすこと。これが極意であったのだ。

「韓国併合100年」にあたり、一人ひとりの市民が日本と韓国の発展的な友好関係を打ち立てる努力を惜しまないのと同時に、沖縄と日本についても「大きな物差し、広い心」でもう一度真面目に歴史をひも解き、沖縄県民大会で示された人々の「後戻りしない」平和への願いと行動に連帯し、自らを未来志向で点検したいものだ。

（医師・常任世話人）

「韓国併合」一〇〇年と日本

中塚　明

今年は日本が韓国をほろぼして植民地にした「韓国併合」から一〇〇年目です。この「韓国」というのは、一四世紀末から続いてきた朝鮮王朝が一八九七年、国の制度を王制から帝政に変え、国の名前を「大韓」と呼ぶようになった、その朝鮮半島全体を支配していた国を指しています。その韓国を日本の領土にしたのが「韓国併合」です。

「伊藤博文は「韓国併合」には反対だった」って、それホント？

この節目の年に「伊藤博文は平和主義の人だった」、「伊藤は朝鮮人を自発的に近代化させようとしたのであって併合には反対だった」などの主張が、この日本で「流行」、ハヤリになっています。これホントでしょうか？

日本は日清戦争（一八九四～九五年）、日露戦争（一九〇四～〇五年）の二つの戦争で朝鮮を独占的に支配するようになりました。伊藤博文は日清戦争のときの日本の内閣総理大臣です。そして日露戦争直後に、朝鮮から外交権を奪う先頭に立ち、ついで「韓国統監」として、朝鮮の植民地支配のお膳立てをした政治家です。

韓国の「独立国の実態」を奪う先頭に立っていた伊藤博文

韓国は日本政府を代表する伊藤博文によって「外国との交渉ごとをいっさい日本に握られてしまった」のです（一九〇五年の「第二次日韓協約」）。その韓国を支配するために伊藤は初代の「韓国統監」としてソウルに乗り込みました。そしてさらに「行政、司法、警察をにぎり、軍隊を解散させ」ました（一九〇七年「第三次日韓協約」）。伊藤は日本を代表して韓国をねじ伏せ、グウの音も出せないようにしたのです。

歴史をもてあそぶ「大学のセンセ、TV・新聞」

こうしておいて「併合して支配するとお金がかかる、朝鮮人にも「自治権」を与え、朝鮮人との対話を続けていくことが大事だ、と伊藤博文は考えていた。しかし、朝鮮人が伊藤のこういう方針に反対したので、心ならずも併合に賛成しただけだ」と京都大学の某センセは「伊藤博文は併合論者ではない」と主張しています。この「新説」にNHKも大新聞も飛びついて、宣伝につとめています。

でも、ちょっとオカシイのと違いますか？　朝鮮の外交、内政を完全に日本がにぎっているのに「朝鮮人にも自治権を与えるって？」、朝鮮人をあざむくそんな伊藤博文に朝鮮人がついていかないのはあたりまえではありませんか。

植民地にされた韓国・朝鮮の人たちから見て「韓国併合」とは何だったのか、そう考えるのではなく、韓国が「併合」されたのはまるで朝鮮人の責任だ、と言わんばかりの言い草。それが「韓国併合」一〇〇年をむかえた日本でハヤリです。寒々としますね。

（奈良女子大学名誉教授　当会代表）

言葉

五月に、詩人のアーサー・ビナードさんの話を聞いた。彼の話を聞くのはこれで三度目。一度目から大ファンになった。どうしてこんなに日本語が上手いのだろう？ただの言葉じゃない。日本の下町の生活の機微をようくわかって、ポンポンと出てくる言葉のおもしろさ。落語の落ちが次々と出てくるような愉快さ。

その日の話は言葉についてだった。彼の故郷ミシガン州は氷河期につくられた五大湖に囲まれていて、氷河に削られた長大な跡があった。残っていれば世界遺産になっただろうに、セメント工場をつくり大儲けをしている奴がいる。「発見」とか「開拓」とかいうと良いイメージがあるが、彼にとっては「破壊」とか「殺される」という意味に変わったという。

（ビナードさんと筆者）

今さかんに使われる「移設」「防衛」「国際貢献」「国益」「抑止力」これらの言葉は巧みに日本人の判断力を鈍らせている。「言葉はとても面白いものだけれど、だまそうという意志があればこわいものだ」「言葉のパッケージと中味が合っているのか点検が大切」と、彼は結んだ。

思えば、かって「非国民」という言葉も、どれだけの人の自由を奪い、生命を奪ったことか。最近はマスコミ各社が戦争中のように人心を煽る。「ちょっと冷静に考えましょう」と呼びかけるところは一社もない。すぐその気にさせられる。わたしもその一人…

吉田佑子（会員）

あらためて核廃絶誓う
花垣さんの被爆体験と紙芝居に感動

6月19日（土）午後、文化会館で定期総会が開かれ、中塚明代表の「今年は日韓併合100周年、被爆65周年、日米安保改定50周年の節目の年である」との挨拶があり、次いで、NPT再検討会議にニューヨークまで行ってきた今事務局長から、基調報告と役員の提案があり、承認されました。

参加者は28人でした。

被爆者花垣ルミさんの講演に先立って、花垣さんの被爆体験を龍谷大学の学生が黒岩先生のご指導の下に卒業製作として作った「おばあちゃんの人形」という紙芝居が上演されました。

上演は紙芝居文化の会の会員である高越恵美子さんが、京都から駆けつけてくださり、立派な「舞台」でマイクなしでしていただきました。

花垣ルミさん

「死んで無念 生きて無念の原子爆弾」
花垣さんのお話

「爆心地から1.7キロで被爆し、母と妹ら5人と爆心地から逃げ延びた。しかし、その体験はあまりにひどいものを見たせいか、被爆したという知識はあったが、体験したことは全く記憶から消えていた。しかし、被爆58年目の63歳の夏、突如鮮明によみがえった。以来語り部としてあちこちで話すようになった。

それは、8月6日、祖母の隣の部屋で遊んでいた時、一瞬からだが浮いた感じがしたと思ったら、飛ばされ、家具に挟まれた。母は、弟をおんぶしていて松ノ木に飛ばされた。一斉に火がついた。蚊帳に火が移る。セルロイドのおもちゃに火が一気につく。熱波もあった。竹藪に逃げたがそこにも火がついた。大きな破裂音がした。子供の下駄を母が借りてきた。犬や猫、鶏などが焼け死んでいた。一緒に逃げようと言ったが、「孫がいるのでこのままいます」と逃げない人もいた。

水飲み場に行くとたくさんの人が倒れていた。今はお爺さんになった弟は、夕方山に行くまでオムツも替えずに母の背中にいたので、お尻がずる向けに爛れていた。私の頭と足の被爆火傷はなかなか治らなかった。

7歳の秋、療養のために奈良のお寺に預けられた。蛭に咬まれたが、被爆のせいか血がなかなか止まらなかった。貧血がひどく、また学校で倒れることもあった。結婚したとき、夫の父が「原爆に遭ったの。よく無事だったね。」と言ってくれたときは嬉しかった。子供が3人。被爆手帳は20歳で貰っていたが、被爆体験が封印されていたので、その自覚はなかった。その後、孫が原因不明の骨髄炎になり、心配したが、被爆と関係がないとわかって嬉し涙を流した。」

紙芝居「二度と」を上演する高越さん

最後に、やはり原爆で両親と弟を亡くした奥村綾子さんを取り上げた紙芝居「二度と」が、高越さんによって上演されました。

真に迫る被曝の体験談と珍しい紙芝居の上演に感動の一日でした。

（常任世話人 吉田恒俊）

「集い」参加者のご感想（アンケート）から

▽70歳とは思えない花垣さんのお元気で力のある語りが印象的。でも内容はとても深みのある、また記憶がはっきりしないなど、体験者でしか語れないものだと、心をうたれた。原爆投下時のドーンという擬音語が、私が今まで考えていたのと違って、本当は低い、ドーンという高橋さんの表現のようなものだったのだ、と再認識した。（50代女性）

▽お話は広島出身として、身につまされ、紙芝居は目と耳と全身で体感できた。（60代男性）

▽飛び入りで初めて参加しましたが、生の体験者のお話に語り続けられていることの素晴らしさを感じ取りました。戦争と核は無くならぬか、考えさせます。（70代男性）

☆今後の予定

- 8月31日(火) 事務局会議
- 9月29日(水) 常任世話人会
- 12月3日(金) 非核平和の集い
  安川寿之輔氏講演会
  「福沢諭吉とアジアー「韓国併合」100年に際してー」（詳細次号）

☆編集後記

深夜に飛び込んできた蝉が朝、台所の箸立ての木箸三本にしがみついていた。窓を開けていたのに帰り道がわからなかったのだ。そろっと箸ごと運ぶと木に向かって飛び立った。そんなことにもはげまされる、生きることのきびしさ。猛暑のなかエアコンなしでの編集作業。伝えたい、読んでほしいの一念でガンバリマシタ。被爆、敗戦65年目、そして潘基文（バンキムン）国連事務総長の「私は平和のために広島にまいりました」の言葉に涙する、核廃絶へ特別な思いの夏ならば。

（郡安ひろこ）